No.1

“和のものづくり” の源流

ー第2講　卓越した日本の石器時代:旧石器時代～縄文時代の日本の先進性ー

＜本講の内容＞
1. 人類はいつから“ものづくり”を行ってきたのか?
2. 日本の旧石器時代の先進性！
3. 日本の新石器時代 “縄文時代”
4. 縄文時代まで日本人はなぜ“文字”を拒絶してきたか？[試論]
5. 総括：受容するヒトHomo Accipientesとしての石器時代の生き方

代表　坂本 治久 [博士(工学)]

1

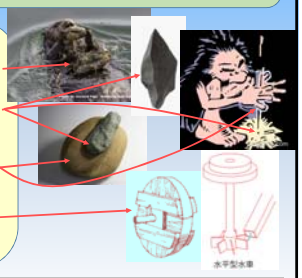
---

1. 人類はいつから“ものづくり”を行ってきたのか?
1.1 “ものづくり”と“道具”の定義 [試論]

2

“ものづくり”と“道具”の定義
- ものづくり：素材に加工を加えて機能や価値を与えるプロセス；
- (狭義の)道具：目的に応じてものづくりにより作り出されたもの。
  ⇒“(広義の)道具” には、ラッコが貝を割る石のような加工を経ないものが含まれる。

道具の技術水準
- 第0次道具：素材のまま用いる道具；
- 第1次道具：素材を、素材同士の単純な加工、あるいは第2次道具、第3次道具を用いて加工(変形又は変質)することにより機能性を与えた道具；
- 第2次道具：第1次道具を加工するためのものづくりに用いる道具；
- 第3次道具：第０次～第2次道具を複数組み合わせて新たな機能や価値を与えた道具。



参考文献[12Smi1][12Miy1][12Coo1][12Kei1][12Hik1]

2

---

1. 人類はいつから“ものづくり”を行ってきたのか?
1.1 “ものづくり”と“道具”の定義 [試論]:[補遺] 石を割るオマキザル(ブラジル)

3

ブラジルのカピバラ山地国立公園に生息するヒゲオマキザルは、石を複数の目的で利用する。石で木の実を割ったり、木の幹や岩に穴を開けたり、地面に穴を掘って餌を得たりする。
さらに、侵食して崩れかけた珪岩の崖で石を拾って別の石に打ち付けて、まるで“礫石器”と同じ形状の石片を加工する様子が観察された！しかし、その目的は、破砕に伴って生じる石粉を舐めることにあるのであり、“石器としての利用”はなされていない。

“第0次道具”としての利用に留まる！

参考文献[12Call1]

3

1.2 人類最古の石器：前期～中期旧石器時代
1.2.1 旧石器時代の時代区分

No.4

年　代	時 代 区 分	代 表 的 石 器 文 化	代表的エリア
約330～30万年前	前期旧石器時代 代表的石器：ハンドアックス 人類種：ホモ・ハビリス、ホモ・エレクトス	オルドワン石器文化：260～180万年前	タンザニア
		アシュール文化：170～10万年前	エチオピア
		クラクトン文化：30～20万年前	イギリス
約30～3万年前	中期旧石器時代 代表的石器：剥片石器 人類種：ネアンデルタール人、デニソワ人	ムスティエ文化：30～3.5万年前	フランス
		アテリア文化：14～2万年前	モロッコ
		デニソワ文化：34～4万年前	南シベリア
約3～1万年前	後期旧石器時代 代表的石器：多様な石器 人類種：新人ホモ・サピエンス	バラドスティアン文化：3.6～2万年前	イラン・イラク
		シャテルペロン文化：3.6～3.2万年前	フランス・スペイン
		オーリニャック文化：3.8～3.3万年前	
		グラヴェット文化：3.3～2.1万年前	
		ソリュートレ文化：2.2～1.7万年前	
		マドレーヌ文化：1.7～1.2万年前	
		ハンブルク文化：1.6～1.3万年前	ドイツ・ポーランド
		アーレンスブルク文化：1.3～1.2万年前	
		スウィデリアン文化：1.1～0.8万年前	

人類は、猿人(アウストラロピテクス)の頃から“道具のものづくり”を行ってきた。
前期および中期の旧人までの単純な石器が、後期に至り爆発的に多様化する！

参考文献[12Wiki1][12Den1]

4

1.2 人類最古の石器：前期旧石器時代
1.2.2 前期旧石器時代のものづくり (1)

No.5

人類最古の石器
(330万年前、ケニア)

クラクトン石器
(42万年前、イギリス)

オルドワン石器
(タンザニアで約260万年前～)

参考文献[12Dra1][12Rek1][12Wiki2][12Sek1][12Wik3]

5

1.2.2 前期旧石器時代のものづくり (2)

6

175万年前から125万年前の石器(最古はケニア)

アシュール石器(約50万年前)

前期旧石器時代の間に対称性や薄刃化がなされ、鋭利で使い勝手の良い第一次道具のものづくりが始まった。

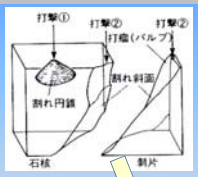
参考文献[12Tok1][12Wik4]

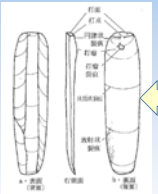
6

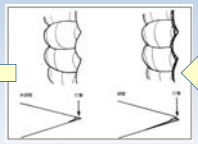
1.2.3 基本的な石器の作り方 (1)

7

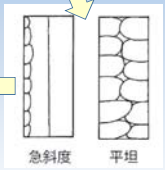
三大石材(サヌカイト、硬質頁岩、黒曜石)







エッジの仕上げ

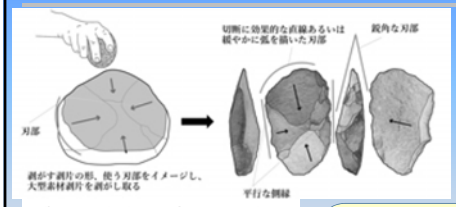


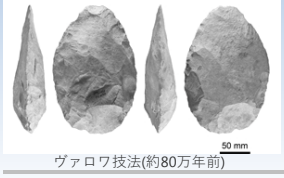
参考文献[12Has1][12Tak1]

Global Techno-Fusion

1.2.3 基本的な石器の作り方 (2)

8





ヴァロワ技法(約80万年前)

石器の基本的製造法は、素材及び加工法ともに世界共通である。石器は、破砕により加工するため、き裂の残留による脆弱化を防ぐために、全面、全エッジの加工を行うように進化してきた。また、中期以降は、生産能率と形状精度の向上が図られた。

参考文献 [12Tok2]

Global Techno-Fusion

1.3 プロメテウスの火：人類はいつから火を使ってきたか？

9

雷による野火は重要な火種！

南アフリカ北部のワンダーウェーク洞窟
(約100万年前に火を使用した痕跡あり！)

火起こしのイメージ

火起こしが確認できているのは約100万年前だが、人類は、それ以前の150万年前くらいから火を使ってきたようである。最初の火種は、雷や火山噴火などによる野火と考えられる。火は、捕食動物や寒さからヒトを守り、タンパク質や炭水化物の摂取を助け、環境において人類をより強くした。

参考文献[12Jih1] [12Coo1]

Global Techno-Fusion

2. 日本の旧石器時代の先進性！ 2.1 日本における“旧石器時代”の発見

10

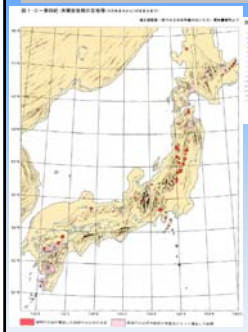
群馬県の岩宿遺跡は、日本で最初に発掘(1949年)された約35,000年前の旧石器遺跡である。そこには、あるはずがない刃の部分だけを研磨した“局部磨製石斧”が存在した！

参考文献[12Nih1]

Global Techno-Fusion

2.2 氷河期の日本列島とその動植物相 (1)

11



2万～１万８千年前の海岸線
（ウルム氷期の最盛期）

氷河期の最盛期(およそ2万年前)に、津軽海峡などの北方の海峡は陸続きになったが、対馬海峡は陸続きにはならなかった。日本人が最初に対馬海峡を渡った38,000年前は、最盛期より80mも水位が高く、伴った海峡の幅も広かった。

参考文献[12Goh1]

Global Techno-Fusion

2.2氷河期の日本列島とその動植物相 (2)

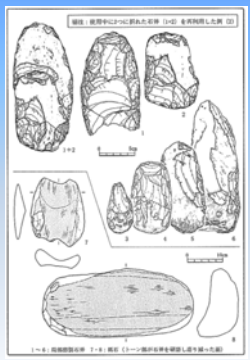
12

参考文献[12Mas1]

Global Techno-Fusion

2.3 日本に独特の石器技術
2.3.1 石器時代の定義を超越した“局部磨製石斧” (1)

13



日本の局部磨製石斧は、 世界最古の“磨製石器”であり、東アジアでは日本独自の技術である。列島内での技術の流通の形跡があり、本州から九州まで200か所以上の遺跡で900点に及ぶ発見例がある！

参考文献[12Anb1][12Tsu1]

Global Techno-Fusion

13

2.3.1 石器時代の定義を超越した“局部磨製石斧” (2)

No.14

図11-6　3万年前の石斧で杉の大木を切り倒す実験(2017年能登)

図11-7　伊豆大島を目指す丸木舟（2018年10月）

局部磨製石斧は、木材加工すなわち伐採や木工に最適！杉を伐って丸木舟を作れる！

参考文献[12Kai1]

Global Techno-Fusion

14

2.3.2 南ルートから広まった“剥片尖頭器”

15

韓国長飛（ヂコ島）遺跡出土スンベチルゲ（台幅可能型）

日本：大分県岩戸遺跡出土剥片尖頭器

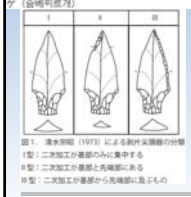


図1　清水宗昭（1973）による剥片尖頭器の分類
I型：二次加工が基部のみに集中する
II型：二次加工が基部と先端部にある
III型：二次加工が基部から先端部に及ぶもの

剥片尖頭器は、剥片加工した石器であり、投げ槍に装着した。朝鮮半島でも多数発掘されており、大陸からの移動に伴って継承されたと考えられる。。

参考文献[12Toh1]

Global Techno-Fusion

15

2.3.3 北ルートから広まった細石刃

16

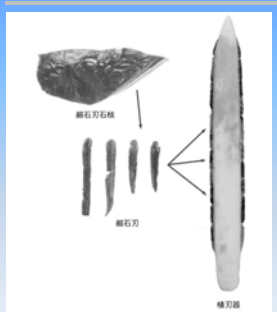


図8-1　細石刃とその使い方。細石刃石核から細石刃を剥がし（左2点：北海道オルイ0.2遺跡出土、写真提供：北海道立埋蔵文化財センター）、それを適当に裁断して角製の槍刃器に埋め込む（右：レプリカ）

図11-1　サキタリ洞で発見された「世界最古の釣針」。貝殻を加工して作られていた（写真提供：沖縄県立博物館・美術館）

細石刃は、北アジアやシベリアと共通の第3次道具である。角など靭性の高い本体に鋭利な黒曜石の刃を複数取付け、刃毀れたら刃だけ交換する。北海道の技術は“湧別技法”として世界的に知られる。沖縄でも世界最古の釣り針が発掘されており、日本人が旧石器時代から繊細なものづくりを行ってきたことがわかる！

参考文献[12Kai1]

Global Techno-Fusion

16

2.3.4 世界唯一の“台形様石器”

17

台形様石器は、 世界で日本にしかない！また、鏃の柄への接合には、秋田、山形、新潟の油田から出る天然アスファルトが用いられ、日本列島の広い範囲に流通していた。

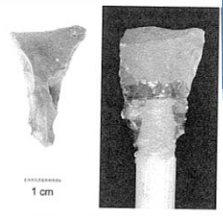


図6-2　台形様石器（左）（秋田県縄手下遺跡出土、秋田県埋蔵文化財センター所蔵）とそれを実験的に柄に装着したもの（右）（写真提供：佐野勝宏）

参考図：投げ槍への石器取付のイメージ

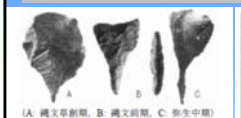
参考文献[12Kai1] [12Tsu1]

Global Techno-Fusion

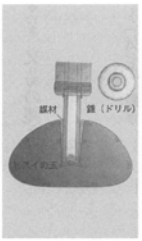
17

2.3.5 現代でも通用する硬脆材料の穴あけ技法

18



(A: 縄文草創期, B: 縄文前期, C: 弥生中期)
Fig. 1　Stone drills in each period[4]



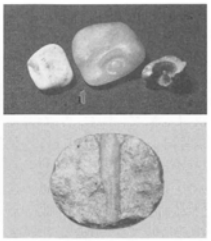


図22　ヒスイの穿孔（右上：管状錐による穿孔途中、ヘソ状の孔
右下：断面の様子　左：穿孔過程の模式図　木島勉提供）

旧石器日本人は、翡翠がモース硬度6.5で鉄(硬度5)より硬いのに、柔らかくしなやかな“竹”と“砂”を使って綺麗な穴を明ける“管錐加工法”を開発していた！この手法は、現代の硬脆材料の穴あけ加工法と原理的に共通する！

参考文献[12Kob1] [12Oon1]

Global Techno-Fusion

18

2.4 海を越えた黒曜石の流通 (1)

19

図6-5 伊豆諸島と周辺域の3万8000年前頃の海岸線。現在の海面を80メートル下げた地図。旧石器時代人によって黒曜石が採取された恩馳島は、当時は神津島と一体化していた

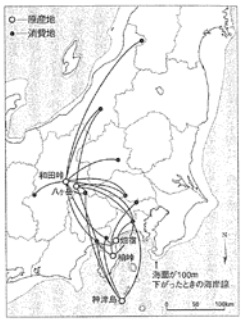


図6-2 旧石器時代の関東地方における黒曜石の運搬（堤，2004を改変）

Global Techno-Fusion

2.4 海を越えた黒曜石の流通 (2)

20

38,000年前から舟を使った海運によって日本各地に黒曜石などの素材が“流通”していた！また、朝鮮半島で九州と白頭山からの黒曜石が併用されている例もあり、旧石器時代以来、半島と列島の間には海を越えた密な交流があった。

Global Techno-Fusion

20

2.5 日本の旧石器時代の生活文化
2.5.1 世界に類例のない罠“落し穴”

21

旧石器時代に罠“落し穴”を使って猟をしていたのは、世界で日本人だけである！しかも穴を列状に並べたり、労力を減らすために前脚が落ちる深さだけにするなど工夫に満ちている！

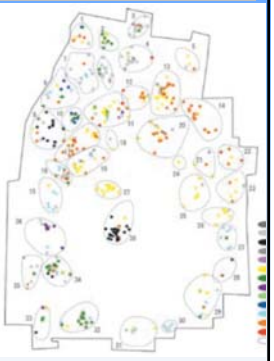
参考文献[12Kun1]

Global Techno-Fusion

21

2.5.2 旧石器時代の住宅:(1) 半定住集落“環状ブロック群”

22



狩猟や採取を主とする生活の中でも栗などの樹木の栽培を始めて“環状ブロック群”という集合住宅地を形成して準定住生活を始めていた！

参考文献[12Yam1]

Global Techno-Fusion

22

2.5.2 旧石器時代の住宅:(2) 定住生活の始まり:“竪穴式住居”

23

はさみ山遺跡(大阪)で日本最古級の住宅を発掘

縄文時代まで6000年ほどさかのぼる旧石器時代後半の約22,000年前に既に円形竪穴式住居が用いられている。これは、定住生活への移行が旧石器時代から始まっていたことを示している。

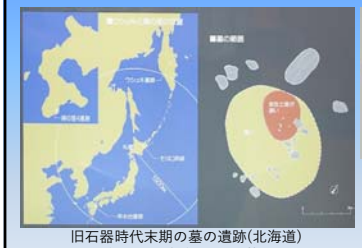
参考文献[12Wik5][12Oos1]

Global Techno-Fusion

23

2.5.3 旧石器時代のお墓事情

24



旧石器時代末期の墓の遺跡(北海道)
・長径1.1m、短径0.9mの楕円形；
・底面に赤色土壌を散布。

装飾品の副葬品
・琥珀製およびカンラン岩の垂飾；
・ほかに石刃核4点、石刃1点、細石刃2点、剥片2点；
・装飾品の原産地は日本以外であることがわかっている。

旧石器時代でも死者を埋葬した土坑墓が見つかっている。装身具や石器などが副えられ、ベンガラが残ったものもある。ほぼそのまま縄文時代に継承された。

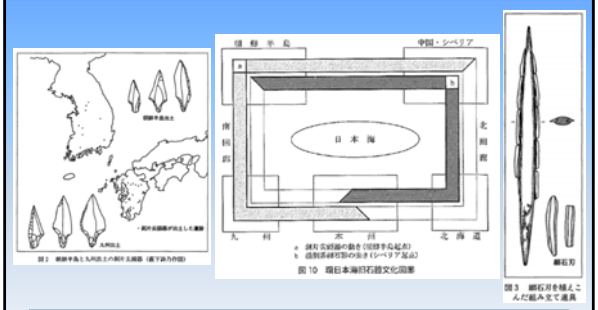
参考文献[12Wik5][12His1]

Global Techno-Fusion

24

2.6 “環日本海石器文化圏”と日本列島への技術の集積 (1)

25



日本列島と大陸の間で日本海を囲み世界最先端の“環日本海旧石器文化圏”を構成し、それらの技術のすべてが日本の中央部に集積された！

Global Techno-Fusion

25

2.6 “環日本海石器文化圏”と日本列島への技術の集積 (2)

26

日本の旧石器時代は、①3種類(尖刃、斜刃、平刃)のナイフ形石器、②局部磨製石斧、③環状ユニット、④黒曜石の利用のすべてを実現した“世界で唯一のエリア”であった。

Global Techno-Fusion

26

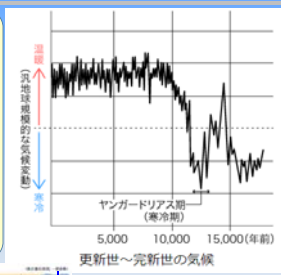
3. 日本の新石器時代:“縄文時代”
3.1 縄文時代の幕開けと年代区分 (1)

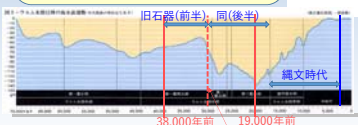
27

[環境変化] 約2万年前から地球規模で温暖化が始まる

① 草創期(約16,000～12,000年前)
旧石器時代の延長、半定住段階

② 早期(約12,000～7,000年前)
旧石器時代の延長、半定住段階
[環境変化] 晩氷期(約13,000年～10,000年前)は、寒冷期と温暖期が短期で入替る厳しい環境⇒約1万年前までには大型哺乳動物が絶滅！
[環境変化] 鬼界カルデラ大噴火！





参考文献[12Chi1]

Global Techno-Fusion

27

3.1 縄文時代の幕開けと年代区分 (2)

28

③ 前期(約7,000～5,500年前)　定住が確立、貝塚の形成始まる
[環境変化] 定住に伴い、照葉樹林や落葉樹林をクリやクルミなどに転換するとともに下草もワラビ、ゼンマイ、フキ、クズ、ヤマイモ、ノビルなどの有用植物に転換した“雑木林” を新たに創造。

④ 中期(約5,500～4,500年前)　東日本で大規模集落が出現する一方、西日本では遺跡数が減り、定住生活が後退。

⑤ 後期(約4,500～3,300年前)　東北～中部は遺跡が小規模分散化、関東では大規模貝塚が出現、西日本は徐々に定住が復活。

⑥ 晩期(約3,300～2,800年前)　瀬戸内から九州北部で水田稲作農耕が普及し弥生時代早期へと推移。

Global Techno-Fusion

28

3.2 世界(ほぼ)最古の土器の発明 (1)

No.29

世界最古級の約16,500年前の無文土器片
(大平山元I遺跡)[Wiki]

弓矢に使った可能性のある石鏃
[リーフレット_史跡大平山元遺跡]

日本で最も古い土器は、青森県で世界最古(級)の無文土器が発見されている。同時に、新石器時代(日本では縄文時代)に使用が始まるとされる弓矢に使ったと思われる石鏃(せきぞく)が発見されており、これも世界最古である。

Global Techno-Fusion

29

3.2 世界(ほぼ)最古の土器の発明 (2)

No.30

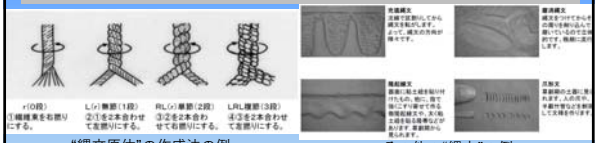
約11,000年以上前の縄文時代草創期の土器の例

Global Techno-Fusion

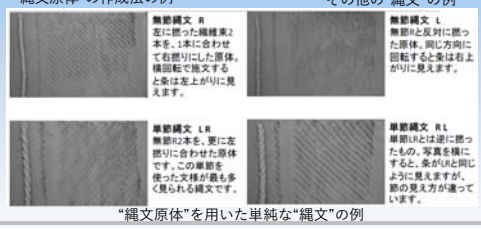
30

3.2 世界(ほぼ)最古の土器の発明 (3)

No.31



“縄文原体”の作成法の例　　その他の“縄文”の例



“縄文原体”を用いた単純な“縄文”の例

参考文献[12Mit1]

Global Techno-Fusion

31

3.2 世界(ほぼ)最古の土器の発明 (4)

32

尖底土器

縄文土器は、実用と祭祀用の両方の用途があった。例えば、“尖底土器”は、縄文時代の集合住宅で一般的であった屋外の共有炊事場の“炉穴”での利用を想定している！

Global Techno-Fusion

32

3.2 世界(ほぼ)最古の土器の発明 (5)

No.33

＜弥生式土器の萌芽＞ [試論]

上野原遺跡(鹿児島)では、約7,500年前の縄文時代の地層から無文の壺形土器(上図)が発掘されている。また、東北の亀ヶ岡式土器も弥生式土器の祖と見做すことができる。縄文土器は、生活文化の変化に伴って弥生式土器へと徐々に変化したと考えられる。

砕いて減量して作る石器と違い、土器は、無の状態から増量しながら造形する点で画期的である。縄文土器は、造形の自由度を活かして芸術的と言える造形美を生み出している。縄文土器の造形的突起は、草創期の最古級の土器群まで遡ることができる！

Global Techno-Fusion

33

3.3 縄文人の生活文化
3.3.1 植生の改賀：“雑木林”の創造！

No.34

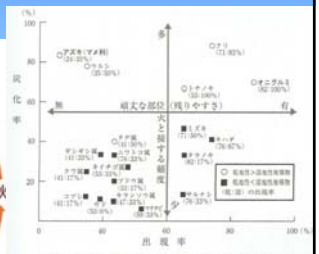
この間、地球規模で温暖化が進むが、初期(約13,000年～10,000年前)は寒・暖期が急激に入替る厳しい環境で大型哺乳動物が絶滅し、狩猟への依存度を下げた定住生活へと推移した。定住化は、周辺の林をクリやクルミなどの有用な樹木とワラビ、フキ、ヤマイモなどの有用な下草からなる“雑木林”へと転換した。

Global Techno-Fusion

34

3.3.2 植物栽培の開始：安定性の高い半猟(漁)半農生活（1）

35



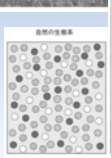
Global Techno-Fusion

35

3.3.2 植物栽培の開始：安定性の高い半猟(漁)半農生活（2）

36

＜現代人の常識を正す！＞
人類が農耕により作り替えた自然は、実は豊かとは言えない。1haの森には300種類以上の植物種が共存していて、「とても豊かである」と言い得る！

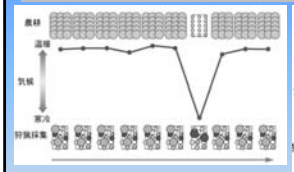


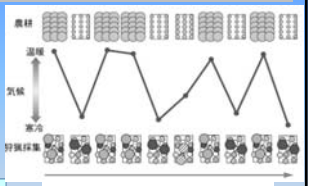
Global Techno-Fusion

36

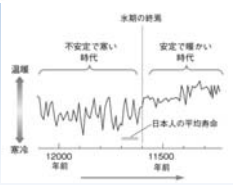
3.3.2 植物栽培の開始:安定性の高い半猟(漁)半農生活（2）

37





＜現代人の常識を正す！＞
気候変動の頻度が低ければ、いずれの社会も継続が可能だが、頻度が高い場合には、「農耕社会は危ない選択」になる！このため、人類は、氷河期の終焉を待って、農耕の取り組みを本格化した。



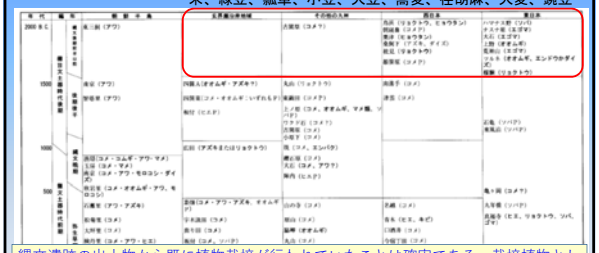
Global Techno-Fusion

37

3.3.2 植物栽培の開始：安定性の高い半猟(漁)半農生活 （4）

No.38

米、緑豆、瓢箪、小豆、大豆、蕎麦、荏胡麻、大麦、豌豆



縄文遺跡の出土物から既に植物栽培が行われていたことは確実である。栽培植物としては、アズキ、エゴマ、ウリ、ヒョウタン、ゴボウなどが検出されている。一方、北部九州では焼畑農耕が行われていた可能性が高く、縄文晩期にはイネ、オオムギなどの穀物の栽培が確認されている。また、東日本では多くの遺跡でソバの花粉が検出されており、これも焼畑農耕による栽培であると推定されている。

Global Techno-Fusion

38

3.3.3 縄文人の住宅事情 (1)

No.39

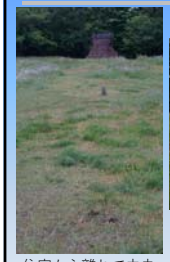
環状の集合居住エリアを形成：
・中央に広場と共有施設；
・周囲を竪穴式住居が取り囲む。

Global Techno-Fusion

39

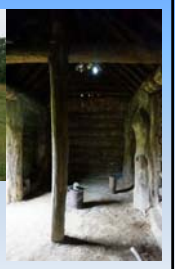
3.3.3 縄文人の住宅事情 (2)

40



住宅から離れて中央に墓石が集中

広場の真ん中に掘立柱建物あり



縄文時代の住居の形態は、竪穴住居が一般的であるが、他に掘立柱建物やテント式で移動可能な平地住居などがある。定住集落は“環状集落”が形成され、その中央広場に墓地と掘立柱建物が配置され、共同作業と宗教的儀式に用いられたと考えられる。

Global Techno-Fusion

40

3.4 縄文人の交易交流
3.4.1 勾玉からみる地域交流

41

小滝川ヒスイ峡(糸魚川)

ヒスイ原石

ネフライト(軟玉)

縄文中期にはヒスイ製勾玉が作られていた。ヒスイの産地、新潟県糸魚川では勾玉工房が発見されており、同地のヒスイが三内丸山遺跡や北海道南部、さらには朝鮮半島の遺跡で出土している。

Global Techno-Fusion

41

3.4.2 鬼界カルデラ大噴火と海洋進出
(1) 朝鮮半島への進出

42

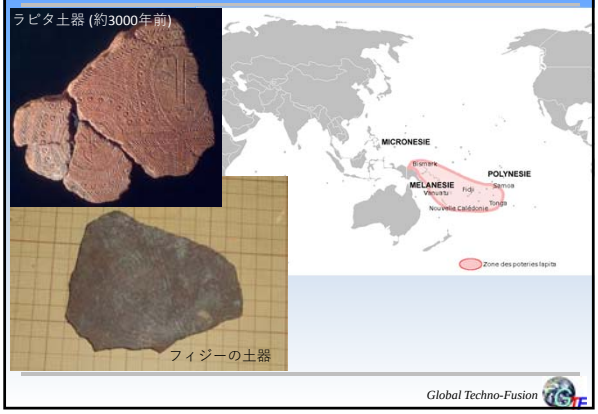
朝鮮半島では、中期旧石器が出土しており、アジアの旧人“デニソワ人”が到達していた。しかし、約12,000年から約5千年間の“人口空白期間”があり、それを打ち破ったのが、鬼界カルデラの大噴火による“滅亡の危機”から脱した九州の縄文人であった。

Global Techno-Fusion

42

(2) オセアニア、その他への進出 (1)

43

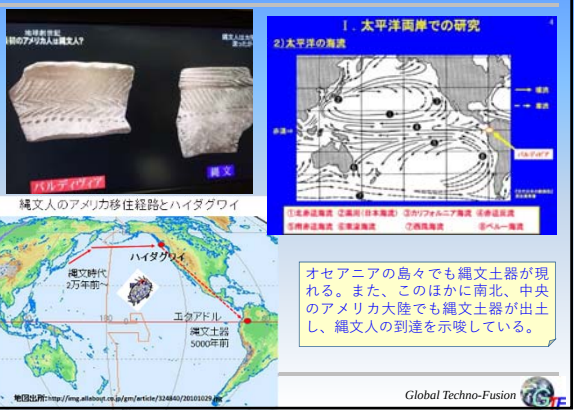


Global Techno-Fusion

43

(2) オセアニア、その他への進出 (2)

44



オセアニアの島々でも縄文土器が現れる。また、このほかに南北、中央のアメリカ大陸でも縄文土器が出土し、縄文人の到達を示唆している。

Global Techno-Fusion

44

3.5 縄文人の信仰 (1)

45

屈葬のイメージ

環状ブロック群の中央に墓地を配置

埋葬個所の上に環状列石が配置されることも…

旧石器時代の死者埋葬文化は、縄文時代にほぼそのまま継承された。環状集合住宅エリアの中央の広場に石の墓標を建てる習慣がごく一般的！

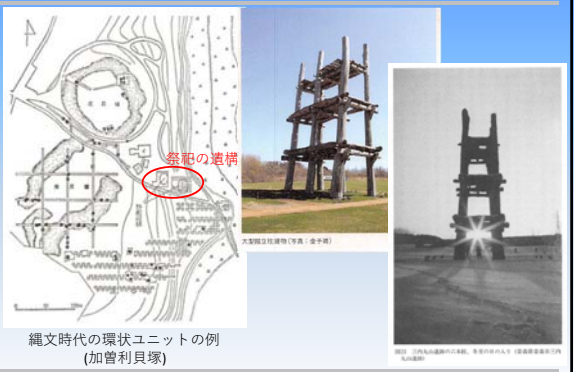
参考文献[12Wik5]

Global Techno-Fusion

45

3.5 縄文人の信仰 (2)

46



縄文時代の環状ユニットの例
(加曽利貝塚)

Global Techno-Fusion

46

3.5 縄文人の信仰 (3)

47

Global Techno-Fusion

47

3.5 縄文人の信仰 (4)

48

日本では、旧石器時代以来、環状の集団住宅サイト“環状ブロック”が形成されてきた。環状ブロックでは、広場を中心に内側から土坑墓→掘立柱建物→竪穴住居→貯蔵穴が同心円状に配置される。墓地が円環の中心を占めることから、墓に葬られた祖先を尊重する宗教観のもとで日常生活が営まれ、日本特有の信仰心が石器時代由来であることを示唆している。

図14　敷石住居と埋甕（東京都八王子市多摩ニュータウンNo.72遺跡）

Global Techno-Fusion

48

4. 縄文時代まで日本人はなぜ“文字”を拒絶してきたのか？[試論] (1)

49

☆言語分類の4体系

1. 孤立語：単語の語形が変化しない：代表例“中国語”；
2. 屈折語：単語の語形が変化する：英語などのインド・ヨーロッパ語族；
3. 膠着語：単語に助詞や助動詞が付いて格や働きを定める：日本語、アルタイ語族、オセアニア、北・東欧、アフリカ、古代シュメールの言語など；
4. 抱合語：１文をひとつの長い単語で表す：アイヌ語、シベリア語、アメリカ原住民語、マヤ語など。

基本語順	言語例
SOV	日本語，朝鮮語，トルコ語，ヒンディー語／ウルドゥー語
SVO	英語，中国語，スワヒリ語，フィンランド語
VSO	ウェールズ語，古典アラブ語，サモア語
VOS	マダガスカル語，ツォツィル語（中央アメリカのマヤ語）
OSV	カバルド語（北コーカサス地方の言語）
OVS	ヒシュカリヤナ語（ブラジルのカリブ語）

☆“語順”の機能性：発信者が伝えたい“事態”を“文章構造”だけで認識可能。
↓
☆“膠着”の機能性：“名詞+助詞”で格が、“動詞+助動詞”で働きが定まるので、語順が替わっても意思伝達可能！
(実は、古英語では“接頭詞”を付けて“語順フリー”であった！)

Global Techno-Fusion

49

4. 縄文時代まで日本人はなぜ“文字”を拒絶してきたのか？[試論] (2)

50

☆“オノマトペ”の多彩さとその活用：

- 日本語：世界に比類なく多様なオノマトペ(擬声語・擬態語)がある。擬態語の多くは、“古語”に由来し、文字の使用より古いものが少なからずある。また、微妙なニュアンスを表現するための“臨時の改変”が許容され、新語であっても日本語としては通じる！
- 他の言語：“擬声語”があっても“擬態語”はほとんどない。また、幼児語としての使用に限定される傾向がある。

“文字”は、(学習を要するため)利用者が制限される一方、微妙なニュアンスを表せないために情報伝達性能が低い。石器時代の日本人は、“文字”の使用目的が(基本的に)“社会的な人の支配”のためであり、「それが日本では不要である」ことをることを、よく理解していたのではなかろうか？

日本では、“人の支配”よりも、異なる由来、社会および文化を有する異人種間での情報交換に適する言語を必要としていた。そのため、(古来からの)自然発生的な言語体系を維持したまま、時間を掛けて実践的な言語に作り上げてきたのであろう。そのような異人種間の情報伝達では、“動詞”よりも、対象物とその状態を表わす“名詞(ものの名前)”と“形容詞およびオノマトペ”が重要であり、主語の省略を許容し、動詞を末尾に追いやったのであろう。

Global Techno-Fusion

50

5. 総括：“受容するヒトHomo Accipientes”流の石器時代の生き方

51

1. 世界水準を遥かに凌駕する技術融合に基づく独創的なものづくりの実現。
2. “環日本海石器文化圏”の技術が集約した石器時代の日本列島！
3. “海洋の覇者”として列島を超えて世界に進出した縄文人。
4. 自然との調和を大切にする持続可能な生活文化の堅持！
5. 現代の日本人にも継承される祖先と自然を崇拝する宗教観の端緒は、石器時代に遡る！
6. 多人種間での交流を旨とする自然発生的言語体系の確立。

Homo Accipientesの三大発展戦略
①多人種間の平和的交流と融和の促進
②技術融合(工夫)による独創的ものづくり
③自然崇拝に基づく持続可能な社会の実現

Global Techno-Fusion

51